

本学歯学部附属病院における新来患者の動向

著者	栗原 直之, 飯久保 正弘, 庄司 憲明, 佐藤 しづ子, 丸茂 町子, 笹野 高嗣
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	17
号	1
ページ	56-65
発行年	1998-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31622

原 著

本学歯学部附属病院における新来患者の動向

栗 原 直 之・飯久保 正 弘・庄 司 憲 明
佐 藤 しづ子・丸 茂 町 子・笹 野 高 嗣

東北大学歯学部口腔診断・放射線学講座

(主任: 笹野高嗣教授)

(平成 10 年 3 月 23 日受付, 平成 10 年 5 月 11 日受理)

Trends of new patients at our hospital

Naoyuki Kuribara, Masahiro Iikubo, Noriaki Shoji,
Shizuko Kuriwada Satoh, Machiko Marumo
and Takashi Sasano

Department of Oral Diagnosis and Radiology,

Tohoku University School of Dentistry

(Chief : Prof. Takashi Sasano)

Abstract: We retrospectively surveyed 19,654 new patients who visited Tohoku University Dental Hospital in 1980, 1985, 1990, and 1995 to study statistical trends in dental patients. The results were as follows:

- 1) The number of new patients tended to increase gradually, especially in females.
- 2) The number of referral patients markedly increased over the years, and in 1995 referral patients accounted for 54.9% of all new patients.
- 3) The average age of new patients increased, and the number of new patients who were less than 9 years old decreased, while the number of new patients who were more than 60 years old increased during the study period.
- 4) As for the clinical department consulted, most new patients, including referral patients, visited the oral surgery department.
- 5) The most common diagnoses were dental caries and periodontal disease, malocclusion, temporomandibular joint disorders, and impacted third molars and pericoronitis, in descending order. Furthermore, the number of patients with dental caries and periodontal disease and malocclusion tended to decrease, while that of patients with temporomandibular joint disorders and impacted third molars and pericoronitis tended to increase during the study period.

Key words: Tohoku University Dental Hospital, new patient, chief complaint, statistical analysis

緒 言

歯学および歯科医療の急速な進歩発展に伴い、最近の疾病構造には変化がみられ¹⁻⁴⁾、この傾向は本学歯学部附属病院を受診する患者にも認められる。本院が大学病院として、変動する地域歯科医療のニーズに応え

るためには、まず、本院の現状および問題点を明らかにし、本院の特徴を明確にすることが必要と思われる。そこで今回我々は、本学歯学部附属病院における疾病構造の変化を明らかにし、これからの本院のあり方に関する基礎的資料を得ることを目的として、本院を受診した新来患者の動向について調査したので報告す

る。

調査対象および方法

調査対象は、昭和 55 年から 5 年毎に、昭和 60 年、平成 2 年および平成 7 年の 4 群(総数 19,654 名)とし、各群の総数、性差、平均年齢、年齢分布、配当先(診療科)、紹介患者の割合および疾患分布について調査した。なお、新来患者の配当先(診療科)については、紹介状を持つ新来患者(紹介患者)では、紹介先の診療科を配当先とし、紹介状を持たない新来患者では、主訴に対する治療科を配当先とした。また、疾患の分類については、新来患者の初診時の主訴をもとに、齲蝕・歯周疾患、不正咬合、顎関節症、埋伏智歯・智歯周囲炎、咀嚼障害、嚢胞、奇形・先天異常、外傷、腫瘍・腫瘍類似疾患、炎症、粘膜疾患、唾液腺疾患、舌痛症、口腔乾燥症、神経性疾患の 15 項目に分け、それ以外の疾患はその他とした。その中から頻度の多い 4 疾患については、特に年齢別に調査した。なお、資料はすべて、口腔診断・放射線科の新患記録を用いた。

結 果

1. 総数および性差

新患総数は、昭和 55 年が 4,612 名(男性 2,124 名、女性 2,488 名)、昭和 60 年が 4,503 名(男性 2,002 名、女性 2,501 名)、平成 2 年が 5,211 名(男性 2,270 名、女性 2,941 名)、平成 7 年が 5,328 名(男性 2,266 名、女性 3,

062 名)で、女性に増加傾向がみられたのに対し、男性にほとんど変化がみられなかった。また、昭和 55 年および平成 7 年の男女差に有意差がみられた(χ^2 独立性の検定, $p < 0.05$) (図 1)。

2. 平均年齢および年齢分布

平均年齢は、昭和 55 年が 28.8 歳、昭和 60 年が 29.5 歳、平成 2 年が 31.3 歳、平成 7 年が 31.9 歳と上昇傾向がみられた(図 2)。また、年齢分布は、9 歳以下に減少傾向、10 歳代および 20 歳代に増加傾向がみられ、30 歳代、40 歳代および 50 歳代には、ほとんど変化がみられず、60 歳代以上の高齢患者には増加傾向がみられた(図 3)。

3. 新来患者の配当先(診療科)

新来患者の配当先(診療科)は、どの群においても、口腔外科が最も多く全体の 42.4% から 52.5% を占めていた。また、新来患者数に増加傾向がみられた診療科は、口腔外科および口腔診断科で、減少傾向がみられた診療科は、保存科および矯正科であった(図 4)。

4. 紹介患者の割合

昭和 55 年の紹介患者は全体の 27.5% であったが、昭和 60 年では 40.0%、平成 2 年では 41.9%、平成 7 年では 54.9% と増加傾向がみられた(図 5)。また、各科の紹介患者数は、口腔外科が大部分を占め、全体の紹介患者の 70.3% から 72.7% であったが、ほとんど全ての科に増加傾向がみられた(図 6)。

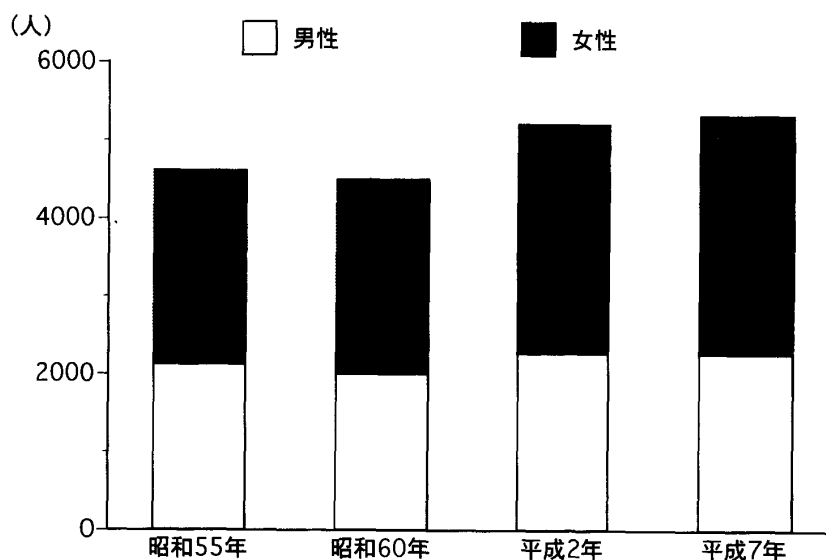


図 1 新来者の総数および性差

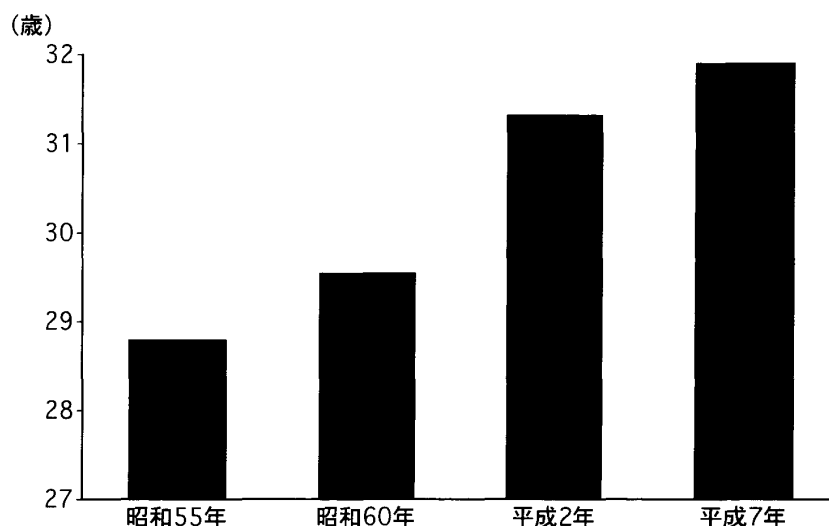


図2 新来患者の平均年齢

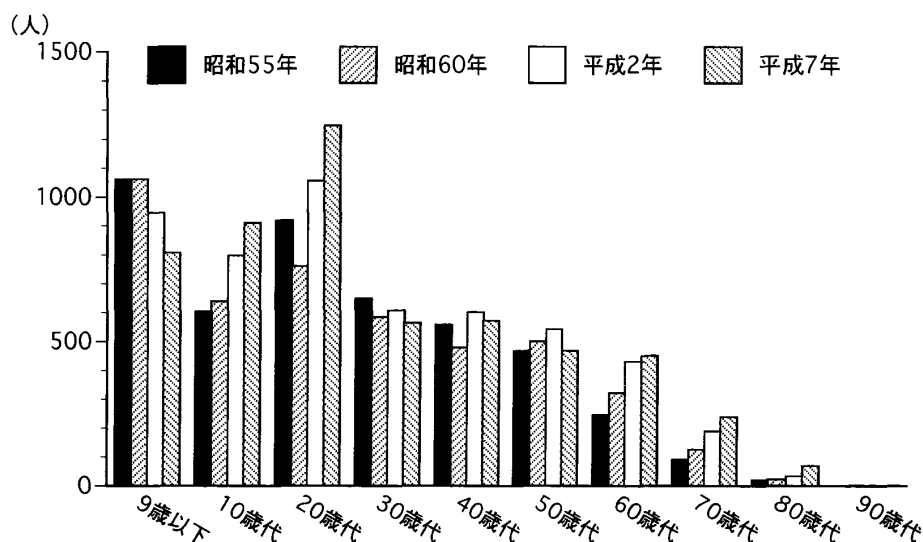


図3 新来患者の年齢分布

5. 疾患分布

図7は、新来患者の疾患を、主訴をもとにおおまかに分類したもので、歯の喪失や補綴物脱離など、補綴処置に関係する場合は咀嚼障害の項目に、また、歯の着色、治癒不全およびアレルギーなど、どの項目にもあてはまらないものをその他の項目に分類した。

まず、疾患の割合は、齲蝕・歯周疾患、不正咬合、顎関節症、埋伏智歯・智歯周囲炎の順に多く、増加傾向の著明な疾患は、顎関節症および埋伏智歯・智歯周囲炎で、逆に、減少傾向の著明な疾患は、齲蝕・歯周疾患および不正咬合であった（図7）。

6. 各疾患の年齢分布

頻度の多い4疾患（① 齲蝕・歯周疾患、② 不正咬合、③ 顎関節症、④ 埋伏智歯・智歯周囲炎）について、新来患者の人数を、年齢別に調べた。

① 齲蝕・歯周疾患

患者数は20歳代に多く、4群とも全体の20.5%から23.7%の範囲内で、若年層で減少傾向が、高齢者で増加傾向がみられた（図8）。

② 不正咬合

患者数は9歳以下、10歳代および20歳代で、全体の97.2%から99.1%とほとんどを占め、9歳以下に減少

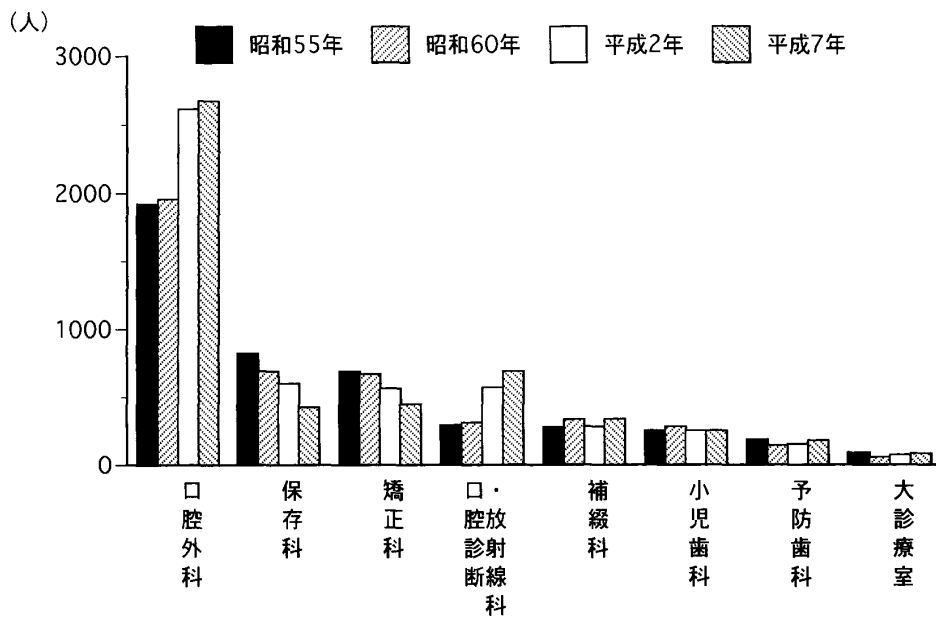


図4 新来患者の配当先 (診療科)

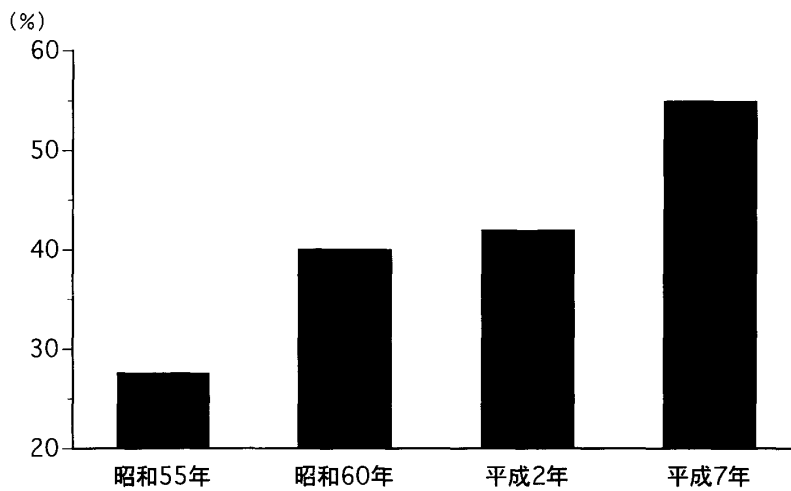


図5 紹介患者の割合

傾向が、逆に、10歳代および20歳代では増加傾向がみられた (図9)。

③ 顎関節症

患者数は、昭和55年では96名であったのに対し、昭和60年では161名、平成2年では472名と増加し、平成7年では741名と昭和55年の7.7倍となった (図7)。また、若年層から高齢者にわたる各年齢層に著明な患者数の増加がみられた。

また、患者は、昭和55年では、10歳代～30歳代および50歳代に多く、平成7年では、10歳代～20歳代に多くみられた (図10)。

④ 埋伏智歯・智歯周囲炎

患者数は昭和55年に166名であったのに対し、昭和60年では198名、平成2年では414名と増加し、平成7年では561名と、昭和55年の3.4倍となった (図7)。特に、若年層の増加が著明であった。

また、患者の年齢層は、各群とも20歳代に多く、全体の42.3%から58.4%と増加傾向にあった (図11)。

考 察

東北大学歯学部附属病院は、昭和42年(1967年)に

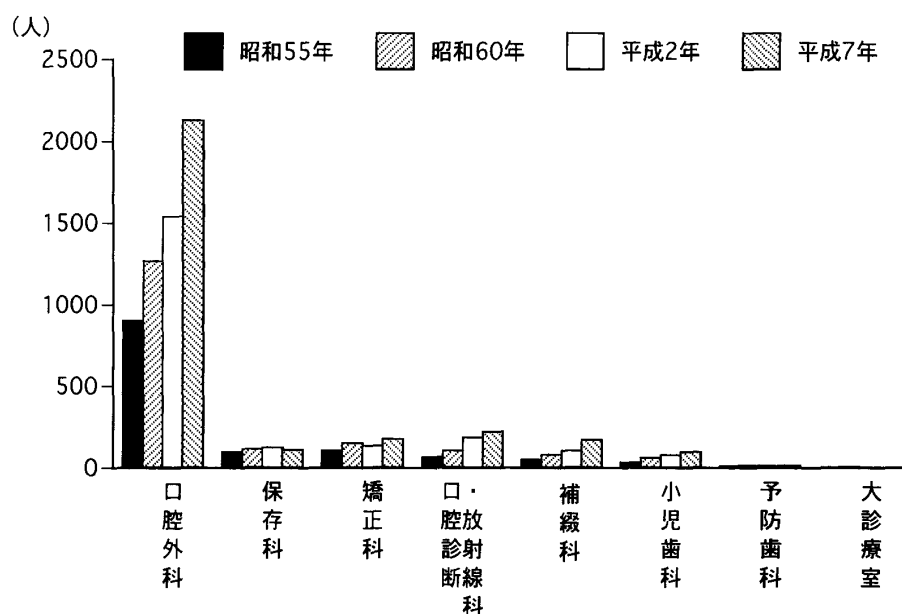


図6 各科の紹介患者数

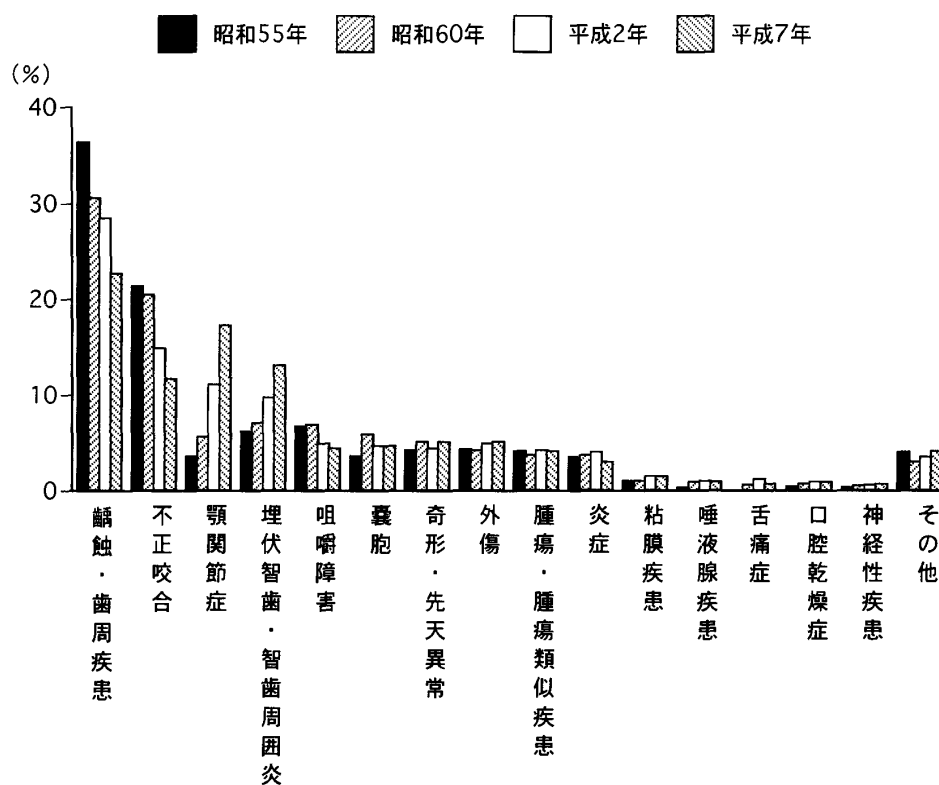


図7 疾患分布

開院され、30年が経過した。現在、口腔診断・放射線科が、全ての新来患者の窓口として、病歴をとり、主訴をもとに各診療科に配当している。

新来患者の動向について、他の歯学部附属病院およ

び歯科大学附属病院でも、いくつかの報告³⁻¹¹⁾があり、以下これらの報告と比較しながら、考察を加える。

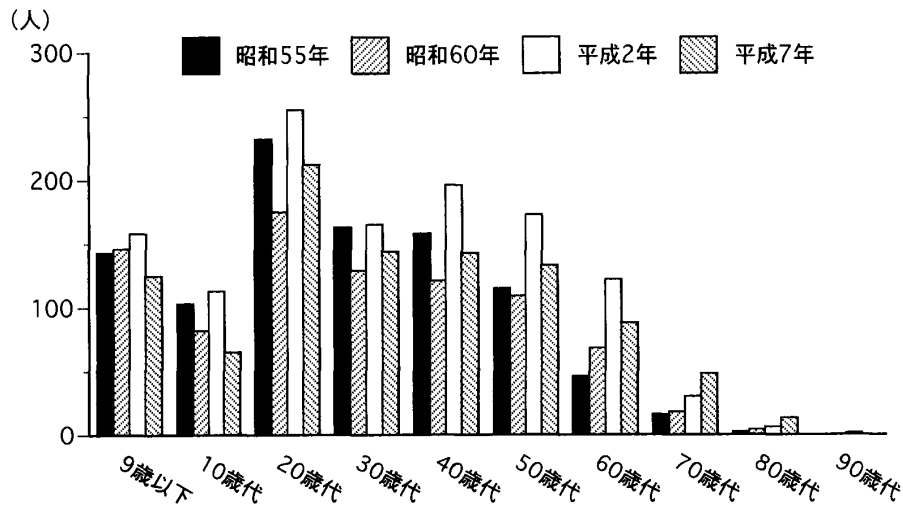


図8 齲蝕・歯周疾患の年齢分布

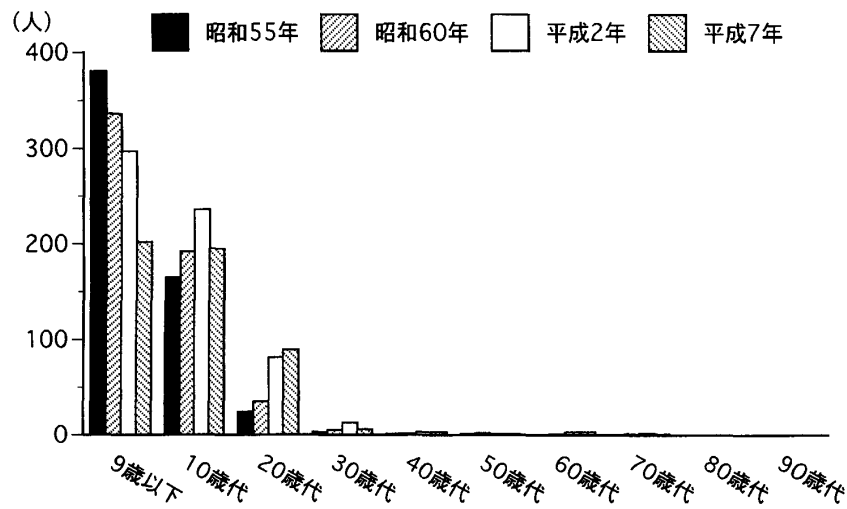


図9 不正咬合の年齢分布

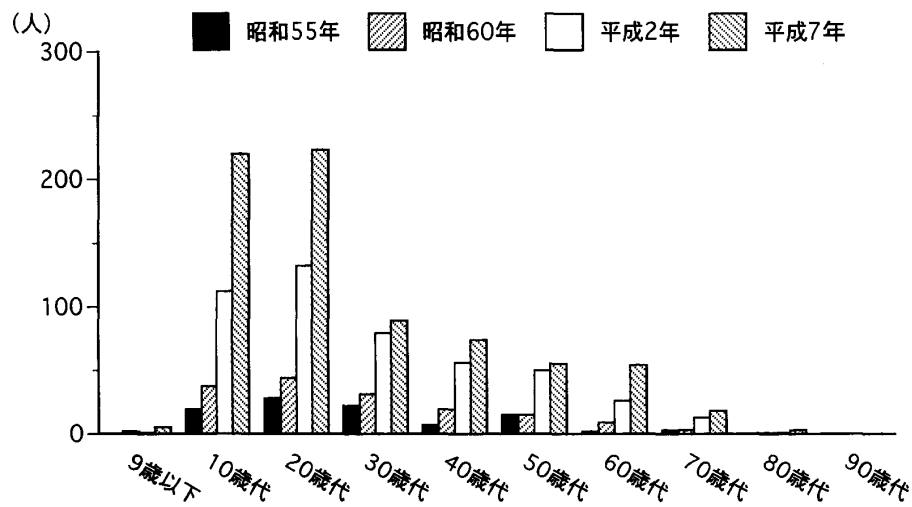


図10 顎関節症の年齢分布

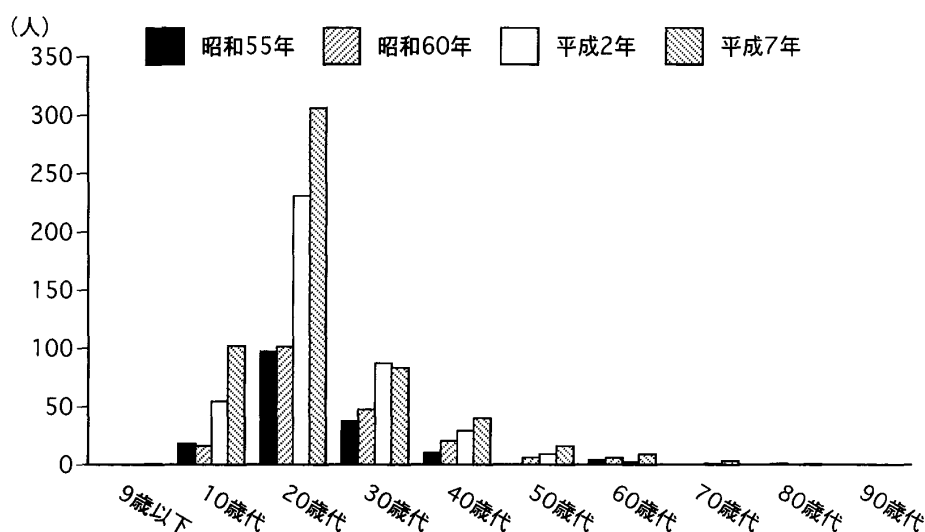


図 11 埋伏智歯・智歯周囲炎の年齢分布

1. 総数および性差

4 群の新来患者の総数は増加傾向にあり、また、全新患 19,654 名の男女比は 1:1.27 と、女性が多く、これらは富野ら(明海大学歯学部)⁴⁾、宮崎ら⁵⁾、加藤ら(ともに九州歯科大学)¹⁰⁾、藤沢ら(東京医科歯科大学歯学部)¹¹⁾、鶴田ら(岡山大学歯学部)⁸⁾の報告と同様であった。これは、女性が男性よりも時間的制約が少なく、来院が可能なが考えられる。また、小川ら(岩手医科大学歯学部)¹¹⁾は、性差は減少すると報告しているが、今回の調査では、性差が拡大する傾向がみられた。

2. 平均年齢および年齢分布

加藤ら(九州歯科大学)¹⁰⁾の報告と同様、新来患者の平均年齢が上昇し、年齢別では、9歳以下の低年齢患者が減少し、60歳以上の高齢患者が増加した。また、戸塚ら(岩手医科大学歯学部)⁹⁾は1992年時の60歳以上の患者数は1983年時に比べて1.5倍に増加したと報告している。本調査でも、昭和55年(1980年)から平成7年(1995年)にかけて60歳以上の患者数が2.1倍に増加していた。低年齢患者の減少については、平成5年度の歯科疾患実態調査¹²⁾における0-9歳児のdmfおよびDMFの減少傾向から、齲蝕の減少に起因していると予想される。また、高齢患者の増加は、厚生省各年簡易生命表¹²⁾における平均寿命の上昇傾向や、日本の将来推計人口¹²⁾における老年人口の増加予想から想定でき得ることであり、今後さらにこの高齢

化が続くと思われる。

3. 新来患者の配当先(診療科)

宮崎ら⁵⁾、加藤ら(ともに九州歯科大学)¹⁰⁾は、全新患のほぼ半数を口腔外科が占め増加傾向が、逆に、保存科、小児歯科、矯正科、補綴科に減少傾向がみられ、その後昭和60年頃より補綴科、矯正科は横這い状態であったと報告している。本調査も、これらの報告と同様、平成2年と平成7年の2群で、口腔外科が全新患のほぼ半数を占め、口腔外科、口腔診断科に増加傾向が、保存科、矯正科に減少傾向がみられた。これは、医師・歯科医師・薬剤師調査が示すように、昭和55年から平成6年の間に、一般歯科開業医数が約1.5倍に、さらに矯正歯科では約4.6倍に急増し¹²⁾、一般歯科的な治療および簡単な矯正治療などは開業医で行われ、開業医では難症例とされる口腔外科に関連する疾患が増加しているためと思われる。また、口腔診断科配当の新来患者の増加傾向については、まず、当科が本院の窓口であることが、医学部附属病院や、歯科開業医に浸透してきたことが第一として考えられる。

4. 紹介患者

富野ら(明海大学歯学部)⁴⁾は紹介患者は増加し、内訳は口腔外科が大部分を占めていると報告し、宮崎ら⁶⁾、加藤ら(ともに九州歯科大学)¹⁰⁾は昭和57年から59年までは上昇傾向を示し、昭和60年から高率化傾向となり平成5年には45.6%となったと報告している。また、小川ら(岩手医科大学歯学部)⁷⁾も昭和50

年の17.1%から58年には40.7%まで増加していると報告している。本調査でも、昭和55年は27.5%、昭和60年は40.0%、平成2年は41.9%、平成7年は54.9%と、他院よりも急激な上昇傾向を示し、本院の二次医療機関としての役割が大きくなってきたことが窺える。

5. 疾患分布

① 齲蝕・歯周疾患

由井ら(東京大学医学部歯科口腔外科)¹³⁾は、齲蝕・歯周疾患・歯の欠損などを一般歯科的疾患と分類し、全新患の約50%を占めたと報告している(1990, 91年)。これに対して、本調査では齲蝕・歯周疾患を一項目とし、由井ら¹³⁾の分類とは異なり、歯の欠損を含む咀嚼障害を別項目としたため、同時期の全体における割合は28.5%と小さい値を示した。年次変化に関しては中野ら(明海大学歯学部)³⁾の報告同様、減少傾向を示した。富野ら(明海大学歯学部)⁴⁾はさらに詳しく硬組織疾患が減少し、歯周炎が増加したと報告しているが、本調査ではそれらをひとまとめにしたため、その詳細については明らかにできなかった。また、年齢層は藤沢ら(東京医科歯科大学歯学部)¹¹⁾の報告同様、患者数は20歳代が最も多かった。さらに、他院と同様、高齢患者に増加傾向があり、その原因として、高齢化および歯の保有率の上昇などが考えられる。特に、歯の保有率の上昇については、平成5年の歯科疾患実態調査¹²⁾で、20歳以上有する人の割合が年次的に増え、一人平均喪失歯が年次的に減っていることが報告され、本調査の結果を裏付けられると思われる。

② 不正咬合

大矢ら(徳島大学歯学部)¹⁴⁾は、患者数は、昭和58年から昭和63年まで減少傾向を示し、平成元年から増加傾向がみられ、成人患者が増加する傾向がみられたと報告しているが、本調査では、患者数には減少傾向がみられ、成人患者の増加傾向がみられた。これは、前述したように矯正歯科開業医の増加により、大学病院での患者、特に低年齢患者は減少し、また、一般成人の不正咬合に対する意識が高まってきたこと、特に、外科矯正の普及などから、成人患者が増加したと考えられる。

③ 顎関節症

富野ら(明海大学歯学部)⁴⁾、虎谷ら(広島大学歯学部)¹⁵⁾の報告同様、患者数は年々増加傾向を示した。これは、マスコミなどの影響により、患者が本疾患へ関

心を高めたこと、1987年に顎関節症型分類が周知されるようになり、歯科医の認識が高まったこと、整形外科医や耳鼻咽喉科医が本疾患を歯科で扱うことへの理解を増したことなどが挙げられる。また、山本ら(明海大学歯学部)¹⁶⁾の報告同様、年齢層の若年化傾向がみられ、顎顔面の成長発育が関与していることが示唆された。

④ 埋伏智歯・智歯周囲炎

図7に示すように、患者数に増加傾向が認められた。これは、口腔外科への紹介患者の増加からも分かるように(図6)、開業医からの智歯抜歯依頼が増え、特に、近年、歯科矯正治療後の後戻り防止のための処置の一つとして、埋伏智歯の抜歯が有効とされ^{17,18)}、矯正開業医からの紹介患者が増加したことが一つの要因と思われる。また、図11に示すように、智歯周囲炎が20歳代に多いという結果が得られたが、これは、智歯の萌出時期が15歳から25歳にあたり¹⁹⁾、さらに、近年智歯の萌出異常が増加しているため²⁰⁾と考えられる。

以上、今回の調査の結果、患者の年齢構成の変化、紹介患者の増加ならびに口腔外科の患者の増加など、本院を高次医療機関とみなしている傾向が得られたことから、治療の特殊性あるいは高い技術が期待されていることが示唆された。今回の調査は、患者自身の主訴をもとにしたものであり、この数は本学歯学部附属病院のあり方を量的に示しているといえる。今後、高齢患者の増加に伴い、難症例や全身疾患を有する患者などが増加すると思われ、大学病院として、このような患者に対しての質的な調査および対応が必要であると思われた。また、現在教育機関としての本学歯学部附属病院のあり方についても検討中である。

結 語

昭和55年から5年毎に昭和60年、平成2年、平成7年に本学歯学部附属病院を受診した新来患者19,654名を調査した。

1) 患者数は、年々増加傾向にあり、特に女性患者が増加した。

2) 紹介患者が著明に増加し、平成7年では全新来患者の54.9%と、半数以上を占めるようになった。

3) 新来患者の平均年齢が上昇し、年齢別では、9歳以下の低年齢患者が減少し、60歳以上の高齢患者が増加した。

4) 各診療科の中では、口腔外科への新来患者およ

び紹介患者が最も多くみられた。

5) 疾患は、齲蝕・歯周疾患、不正咬合、顎関節症、埋伏智歯・智歯周囲炎の順に多く、齲蝕・歯周疾患お

よび不正咬合は減少傾向にあり、顎関節症および埋伏智歯・智歯周囲炎は増加傾向にあった。

内容要旨：本学歯学部附属病院における疾病構造の変化の一端を知ること、また、これからの本学歯学部附属病院のあり方に関する基礎的資料を得ることを目的に、昭和55年から5年毎に昭和60年、平成2年、平成7年に当院を受診した新来患者について調査した結果、①患者数は、年々増加傾向にあり、特に女性患者が増加した。②紹介患者が著明に増加し、平成7年では全新来患者の54.9%と、半数以上を占めるようになった。③新来患者の平均年齢が上昇し、年齢別では、9歳以下の低年齢患者が減少し、60歳以上の高齢患者が増加した。④各診療科の中では、口腔外科への新来患者および紹介患者が最も多くみられた。⑤疾患は、齲蝕・歯周疾患、不正咬合、顎関節症、埋伏智歯・智歯周囲炎の順に多く、齲蝕・歯周疾患および不正咬合は減少傾向にあり、顎関節症および埋伏智歯・智歯周囲炎は増加傾向にあった。

文 献

- 宮武光吉：21世紀の歯科疾患の動向をみる—齲蝕の動向—。歯医学誌 **14**：80-89, 1995.
- 渡邊達夫：21世紀の歯科疾患の動向をみる—歯周疾患の動向—。歯医学誌 **14**：90-97, 1995.
- 中野憲一，岡田典久，増田 屯，大澤孝一，中田公人，田中庄二，藤倉もり子，後藤俊介，中里義博，小峰一雄，福田睦子，町野 守，山口裕之：明海大学歯学部予診科における過去16年間の新患の臨床統計的観察。明海歯学誌 **18**：382-389, 1989.
- 富野照久，藤沢盛一郎，三村里香，麻生幸男，寺坂弘司，深美 勝，森 信幸，山本公紀，山根恭子，柏木康司，村上幸生，岡田典久，田中庄二，町野守：明海大学歯学部口腔診断科における新患の過去6.5年間の臨床統計的観察。日口診誌 **10**：302-307, 1997.
- 宮崎秀夫，中山浩太郎，十亀 輝，斎藤敏昭，佐伯榮一：九州歯科大学附属病院における初診患者の統計的観察（その1）。九州歯会誌 **39**：622-629, 1985.
- 宮崎秀夫，中山浩太郎，十亀 輝，斎藤敏昭，佐伯榮一：九州歯科大学附属病院における初診患者の統計的観察（その2）。九州歯会誌 **39**：630-637, 1985.
- 小川光一，石井由美子，戸塚盛雄，長田亮一，松丸健三郎，上野和之：岩手医科大学歯学部附属病院における最近9年間の新来患者の臨床統計的観察。岩医大歯誌 **10**：149-160, 1985.
- 鶴田敬司，梅田浩将，鳥山和茂，尾崎雄一郎，高橋利近，西嶋克巳：岡山大学歯学部附属病院開設後5年間の総合診断室における患者の推移。日口診誌 **1**：141-145, 1988.
- 戸塚盛雄，小川光一，福田容子：年代別新来患者数の年次推移と現在歯数について。岩医大歯誌 **18**：170, 1993.
- 加藤恭裕，栗野秀慈，嶋崎義浩，邵 仁浩，白川聡子，藤田智恵，淵 朋子，村田貴俊，宮崎秀夫：九州歯科大学附属病院における初診患者の最近9年間の動向について。九州歯会誌 **50**：374-379, 1996.
- 藤沢盛一郎，山本 仁，山本あかね，池内 仁，石田 恵，五十嵐公，佐沢尚子，早川淑子，清水チエ，黒崎紀正：総合診断部における4年間の新来患者の臨床統計的観察—1986, 87, 89, 90年度の患者の動向—。口病誌 **64**：376-383, 1997.
- 歯科統計資料集編集委員会：歯科統計資料集—1997・1998年版。財団法人口腔保健協会，東京，1997, pp.1-142.
- 由井 悟，古森孝英，伊東大典，小林真巳，中津留誠，田中 妙，柳 文秀，赤川徹弥：最近2年間の当科受診患者における臨床統計的検討。日診誌 **6**：12-16, 1993.
- 大矢幸子，日野優子，矢部祐子，天真 覚，河田照茂：徳島大学歯学部附属病院における矯正患者の動向。日矯歯誌 **53**：591-597, 1994.
- 虎谷重昭，岡本哲治，重森和子，尾崎輝彦，藪本正文，谷 亮治，田中良治，越智 康，高田和彰：顎関節症患者の症型分類による臨床統計的検討。広歯誌 **28**：224-230, 1996.
- 山本公紀，町野 守，山根恭子，佐藤範子，深美優，寺坂弘司，藤沢盛一郎：中学生の顎関節症についての2年間の検診結果について。日口診誌 **9**：494, 1996.

- 17) Bishara, S.E. and Andreasen, G.: Third molars: A review. Am. J. Orthod. **83**: 131-137, 1983.
- 18) Richardson, M.E.: The role of the third molar in the cause of late lower arch crowding: A review. Am. J. Orthod. **95**: 79-83, 1989.
- 19) 河西秀智: 日本人における智歯の統計的観察 (智歯の出現, 発育, 萌出の時期と頻度について). 口病誌 **26**: 463-478, 1959.
- 20) 須佐美隆史, 矢野尚子, 高倉百々子, 古森孝英, 森良之, 富塚 健, 松本重之, 高戸 毅, 豊岡照彦: 大学生の口腔健康状態に関する調査—パノラマ X 線写真による歯の観察—. 口病誌 **63**: 459-467, 1996.